

親鸞仏教センター通信

2009.
September

2009年9月1日発行
発行者 本多 弘之
編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)
〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7
TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901
e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp
ホームページ <http://shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第31号

「ダーウィン年」に寄せて

親鸞仏教センター研究員 常 塚 聡

今年(2009年)は、チャールズ・ダーウィン(1809~1882)の生誕200年、そして『種の起源』(*The Origin of Species*)が出版(1859年11月24日)されてから150年目という科学史上における記念すべき年にあたる。ダーウィンによって理論づけられた進化論は、従来の自然観にまさに「コペルニクスの転換」—コペルニクス自身によるものに続く二回目の—をもたらした。人間は創造主である神によって特別に全世界の支配者として選ばれた存在であるという、それまでの認識に大転換を加えたのである。

当然、この変革が素直に人々から受け入れられたわけではない。特に、キリスト教の保守的な立場からの反対は強く、現在でもアメリカを中心として進化論がキリスト教の教義とは相容れないという主張をする人は多い。

もちろん、個人が進化論を否定する信条をもつことは自由だ。だが、保守的なキリスト教徒が主張するように、科学が示す世界観が宗教の世界観と決定的に相容れないとは、私には思えない。

現代の科学の知見によれば、現在の脊椎動物のすべては、もとをたどれば約5億年前のカンブリア紀に生息していたただ一種類の(あるいはそれと近縁の数種類の)原索動物の子孫である。われわれ人間の体にも、そのはるか遠い祖先の—遺伝情報に刻まれた—記憶が残っている。脊椎動物の体の構造がみなほとんど同じなのは、その共通の祖先の記憶を受け継いでいるからである。

しかもわれわれ生物は、遺伝情報という同じ基礎の上に、それぞれが何とも見事な環境への適応を見せている。地球上で、生命が存在しない場所はほとんどないといってよい。人間が生きられる環境はごく狭いものだが、生命全体としてみれば地球のほとんどすべての環境に生命が息づいている。それも、生命の誕生以来決して途絶えることなく、生命の営みは地球上で続けられてきたのである。

生命というものはなんと力強く、そして素晴らしいものであろうか。そして、今ここにこうして私が存在しているということが、なんと不思議で希有なことであることか。生命の事実を前にして、こう感動の声を挙げるのは、何も宗教家にのみ許された特権ではあるまい。「ダーウィン年」である今年を機会に、あらためて生命の尊さを考えてみたいものである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑪

地獄・餓鬼・畜生の無い国

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第24回、25回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第24回では、「本願文（第十一願）」について、第25回では、「第十一願文（続）」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行なわれた第20回からその一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■ 地獄の苦悩

法蔵菩薩が、その第一番目の願で衆生に呼びかける内容は、「たとい我、仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』15頁、東本願寺出版部）。我が国の中に地獄・餓鬼・畜生があるならば、自分はさとりを開かないと。

地獄の苦悩は、源信の『往生要集』では、大変、迫力ある文章として描かれております。人間は、そういう文章を読むと、何かどこかで思い当たる節がある。例えば、葉が剣になっている樹がある。その上で、すばらしく美しい女性が呼ぶ。それは、つまり、この世で女性に迷惑をかけた、大変悪いことをした、そういう人間が落ちる場所だと教えるわけでしょうけれど、女性が呼ぶ。行きたいものだから、登ると、葉が全部下を向く。それをものともせず登って、血だらけになり、肉が裂け、骨が傷ついて、上についたら女性が居ない。どこに行ったかと。下に行っている。また、下で呼ぶ。来てほしいと。下りて行こうとすると、今度は葉が全部上を向く。そんなような、ひどいことを描

いているのです。そのようなところに落ちるのは嫌だと思いつつ同時に、自分も落ちるなどという感じもするわけです。人間として、この地獄・餓鬼・畜生というようなものを嫌うのですが、嫌っている人間自身が、地獄・餓鬼・畜生を持っているのです。

地獄・餓鬼・畜生を持っている人間であるからこそ、本当にそれを超えたような場所を与えようと。地獄・餓鬼・畜生があるなら正覚を取らないということは、地獄・餓鬼・畜生が満ちているこの娑婆を見捨てるのかと。そうではない。むしろ地獄・餓鬼・畜生が満ちている場所にはたらいで、地獄・餓鬼・畜生を突破できるような場所にする。地獄・餓鬼・畜生の存在をこそ摂して、その苦悩から解放して、我が国土の衆生としたい。これは、本当に実現するとなると、測れないような時間、つまり「兆載永劫」と語られるような物語的時間がかかる。永遠の努力をしてでも実現したいという願いと、その願いが課題とする内容。こういうことが教えられると、われわれは、そう簡単にたすかる存在ではないということに気づかされると共に、どれだけ深い罪であってもたすけずんば止まんとはたらし続ける願いがあると気づかされる。

■ 寿終わりで

続いて第二願では、「たとい我、仏を得んに、国の中の人天、寿終わりでの後、また三悪道に更らば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』15頁）と。地獄・餓鬼・畜生を三悪道と言う。地獄・餓鬼・畜生は無い。しかし、そうした寿が終わった後に、また三悪道に更なれば、正覚を取らないと。これは、第十五願にいきます

と、浄土に生まれた人は寿命が無限であると言っているのです。しかし、その第十五願には、自分で寿命をちぢめるのは自由ですよ、ということがついているのです。つまり、永遠の寿はいらない、有限な寿の中で自分の存在の意味を尽くしてはたらきたいと、そういう人間は、浄土から自由に出ていってよいと。でも、そうして出ていくときには、ちゃんと阿弥陀の功德が必ずついている。これが還相回向^{げんそう}という意味になるわけです。浄土の寿は無量ではなかったのかと。基本的には無量だと。でも、無量の寿をいただくということは、自由の寿をいただくということでもある。そういうことが背景にあって、ここで寿が終わるということが出てくるわけです。

自分に都合のよいことだけを積み上げていきたいという願いが、どうしても人間の発想にはついてくる。それで人間が本当に満ち足りるかという、満ち足りない。人間としての本当の喜びを求めて生きているのに、功利的な意味だけを価値として積み上げるということになると、人間存在の大切な部分はほとんど切り捨てられる。そういう問題が現代文明でしょう。どうもひどい状態だと思うのです。この頃、ますますそうです。確かに経済的に、物の豊かさとかは、もう満ち足りるほどに満ち足りたのだらうと思うのですけれども、何かおかしい。何か足りない。それをまた満たそうと思って、また欲望を起こしてしまふ。求めている本当のところ分からないわけです。人間の中には、自分では分からない大切なものを求めながら生きている部分がある。それを清沢満之先生は、「人心の至奥より出ずる至盛の要求のために宗教あるなり」（『御進講覚書』）と。つまり一番の深みから出る、一番真面目な要求、激しい要求、これが宗教心だとおっしゃるのです。そういうものがどこかで人間を突き動かしている。

だから、そういうものに出会う時には、この有限の寿の中に、たとえ寿が終わっても十分に満ち足りるような意味がある。その譬喩として、ここで寿が終わるということを言うのではないかと思います。

■ 人間の中の深い願い

とどまらずずっと居ることが寿の意味ではない。たとえどれだけ去りたくなくても、この娑婆はいずれ去らなければならない。でも、充分に意味があったという寿でありたい。そういう欲求がどこかにある。人間は、その願いが分からないから、何か違う形でつくりたいと思う。銅像を造りたいとか、そのようなものをつくってもしようもない、邪魔になるだけです。でも分からないのです、深い願いをもちながら。

人間が居る限り、地獄・餓鬼・畜生はなくなる。少しずつよくしたら、いずれ無くなるだろうなどというのは、人間の見方が甘いのです。自分の心を観ずればよく分かる。地獄・餓鬼・畜生を消したら、私ではなくなってしまふ。だから、自分からなくせないけれど、悲願なのだと。法蔵願心を聞くということが、われわれには与えられている。願心の通りになるとか、願心が自分に実現するとか、そういうことは出来ないかも知れないけれども、願心に照らされて、自分を聞く、自分を見直すのです。悲しい事実として私たちは、地獄・餓鬼・畜生から足が洗えない。足を抜けない。けれども、法蔵願心は、それが無い国を願い続けているのだということに気づくことは出来る。人間存在の罪の深さですね。それをつくづく思います。そういうことが、地獄・餓鬼・畜生について、第一願、第二願と、二度も誓うということかと思えます。

（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2009年 9月 休 会
10月27日(火)午後6時30分～9時
11月24日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

— 現代と親鸞の研究会・第32回 —

持続可能な社会への転換

— 「低炭素社会」実現に向けて —

国立環境研究所特別客員研究員 西岡 秀 三



西岡秀三 氏

2009年3月10日、アルカディア市ヶ谷（千代田区）において、国立環境研究所特別客員研究員の西岡秀三氏をお迎えして「現代と親鸞の研究会」を開催した。

温室効果ガス排出による深刻な地球温暖化の問題に対し、産業革命以来の人間のあり方、社会構造、ライフスタイル、エネルギー文明など、あらゆるものを見据えながら、豊かで平等な社会を持続していくための「低炭素社会」実現への具体的なシナリオを作成された西岡氏に「持続可能な社会への転換—「低炭素社会」実現に向けて—」をテーマに語っていただいた。その一部を紹介する。（囑託研究員 本多雅人）

■ 温暖化の問題

私は、環境というのは人間と自然の入り合ったところという定義をしております。

人間の構造を決めているのは正にそれぞれの環境であり、とりわけ安定した気候こそ人々の幸せな営みの基礎だと考えています。ところが、産業革命以降の人間の活動は、自然資源を枯渇させ、二酸化炭素（CO₂）に代表される温室効果ガス（他にメタン、一酸化二窒素など、計6種類）の排出により、気候変動を生じさせ、生態系を破壊してしまうなど、いわゆる地球温暖化の問題を引き起こしました。社会システムそのものも気候を前提にして出来ていますが、それが気候変動によりバランスがとれなくなってきたのです。私が関わっている IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の第四次報告書では、この温暖化の原因は人為的行為の結

果であると断定しています。

この100年で気温が0.74度上昇したとされていますが、IPCC では、これからさらに2度～3度上昇しますと深刻かつ危険な状況に陥ると警告しています。このまま温室効果ガスが排出され続ければ、30年ほどでその危機が訪れることになります。具体的には、ツバルをはじめとした南の島国が海面下に沈むこと、水資源の枯渇、淡水地域への塩水流入による農作物の被害、頻繁な大型台風の発生、干ばつと洪水の発生、多くの生態系の破壊や生き物の絶滅など、枚挙にいとまがありません。

温室効果ガスの排出を抑えたとしても、すでに大気中に限界を越えて溜ま^たっているわけですから、なかなか減りません。安定化するまでに2～300年かかります。さらに濃度が一定になったとしても、気候が安定化するにはまだまだ数世紀かかるのです。ですから早めに手を打っておかないと大変なことになるのです。この温室効果ガスの大量削減を伴う容易ならぬ変革を求められていることを深刻に受け止めなければなりません。

■ 持続可能な社会への転換

— 低炭素社会実現に向けて —

「持続可能な社会」とは、一つの平等な社会であり、誰もが豊かになって、それがいつまでも続く社会です。具体的には「低炭素社会」の実現であり、低炭素排出で安定した気候のもとで持続可能な社会のことです。気候を安定化させるには、石油などの化石燃料利用の廃棄物である CO₂ の人為的排出量を自然の吸収量、つまり陸上生態系と海洋が吸収できる範囲内に押

える「定常化社会」を目指すことです。温暖化による水資源、農業資源、自然資源の劣化により人類生存基盤が危うくなっているの、まず温室効果ガスを削減することが先決です。

世界全体として低炭素社会の構築に乗り出したというのは洞爺湖サミットであり、福田ビジョンです。洞爺湖サミットでは2050年までに世界の温室効果ガスの排出量を半分にしようと合意しました。日本は一人当たりのCO₂排出量というのは途上国の2.5～3倍ぐらいですから、日本は70%ほど減らさねばなりません。これをどう進めるかについて、われわれは、2050年の望ましい社会像をまず設定して、そこに大幅削減の目標をかぶせ、そこに向かって、未来からの要請を実現するために、今からどのような手を打っていけばよいかを探る手法をとっています。これを「バックキャストिंग」と言います。

2050年に想定されるサービスを満足させながら、温室効果ガスを70%削減する技術的ポテンシャルは可能なのです。ここで気をつけていただきたいことがいくつかありまして、想定されるサービスを満足するとはどういうことかという、これだけ明さがほしいとか、交通はきちんと確保してほしいと求められたら、それにきちんと応えるということです。これがサービス市場です。消費者がほしいのは適切なサービスであって、そこで消費されるエネルギーではありませんから、便利さをいかにエネルギーの少ない形で実現できるかが技術に求められているのです。ですから、要求されるエネルギーをなるべくCO₂の排出が少ないエネルギー源から供給する必要があります。

エネルギー需要のおおむね半減とエネルギー供給の低炭素化によって「低炭素社会」は実現可能なのです。削減は個別技術の開発・導入だけでは実現できませんから、需要側の省エネ努力と正しい技術選択や都市・交通などのインフラストラクチャーからなるさまざまな社会構造の変化が必須であり、同時に、エネルギー供給側では、低炭素エネルギー源の適切な選択とエネルギー効率の改善の組み合わせで、低炭素化が図られるのです。そのためにも、なんといっ

ても政府の強いリーダーシップが必要なのです。

気候というのは地球公共財なのです。そうなってくると、世界全体で協力することが大事であり、今や競争から協力の時代に入っているのです。その協力の枠組みの中で競争するという時代になってくる。つまり、低炭素社会においては、社会的責任としての自社業務から排出するCO₂削減は当然として、その製品・サービスを利用する時のエネルギーやCO₂排出を少なくすることで市場競争力を強めることができるのです。

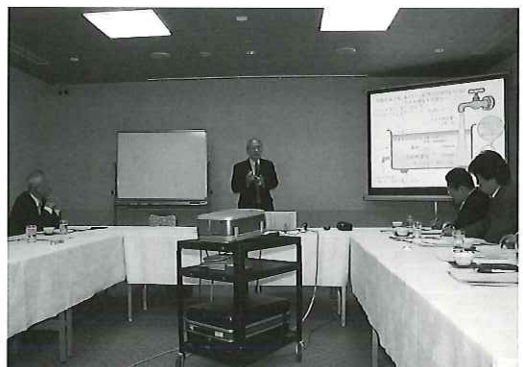
さしあつたって、持続可能な日本の新構築が求められているのではない、そういう全面的に重要な転機に来ていると思います。それは経済だけにとどまらず、人々の生活・価値観やエネルギー文明のあり方まで問われているのです。

(文責：親鸞仏教センター)

※西岡秀三氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第19号（2009年12月1日号）に掲載予定です。

西岡 秀三（にしおか しゅうぞう）国立環境研究所特別客員研究員

1939年、東京都に生まれる。東京大学工学部機械学科卒業。東京大学大学院工学系研究科機械工学専攻博士課程修了。専門は機械工学、環境システム工学。工学博士。旭化成工業を経て、国立公害研究所（現・国立環境研究所）に入所。東京工業大学大学院教授、慶應義塾大学大学院教授、国立環境研究所理事を歴任。著書に、『日本低炭素社会のシナリオ—二酸化炭素70%削減の道筋』（日刊工業新聞社）、『環境用語事典—用語がわかる！ 実践できる！』『地球環境を守る人々 1～6』（以上、学習研究社）、『新しい地球環境学』（古今書院）、『温室効果ガス削減技術—京都議定書の目標達成のために』（共著、エネルギーフォーラム）など多数。



「現代と親鸞の研究会」（千代田区の「アルカディア市ヶ谷」で）

議の本願、無上智慧の尊号をききて、一念もうたがうころなきを、真実信心というなり。金剛心ともなづく。この信樂をうるとき、かならず攝取してすてたまわざれば、すなわち正定聚のくらしいにさだまりなり。このゆえに信心やぶれず、かたぶかず、みだれぬこと、金剛のごとくなるがゆえに、金剛の信心とはもうすなり。これを「迎」というなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五四九頁)

語 註

①「正定聚」親鸞は『一念多念文意』の中で次のように述べている。

「往生すとのたまえるは、正定聚のくらしいにさだまるを、不退転に住すとはのたまえるなり。このくらしいにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆえに、等正覚をなるともとき、阿毘拔致にいたるとも、阿惟越致にいたるとも、ときたまう。」(『真宗聖典』五三六頁)

すなわち、正定聚とは大涅槃に至るべき身となる、ということである。

試訳をめぐって

【原文】この利益におもむくを、「来」という。

【現代語訳】このような本願がもたらす利益を信じ、その中に自らの身を置くことを「来」という。

「おもむく」とは、「おも(面)向く」を原義とする、「向かつて行く」という意味の言葉である。それはひとつの方向性をもった、さらには自らというような自発性・能動性をもった言葉である。「おもむく」は「来」であるといわれるのだが、全く逆の方向性をもつ、この二つの言葉が同義語として扱われていることに対し、研究会では活発な意見が交換された。

そもそも、「この利益」とは何を指すのか。本文を遡れば、それは浄土に來させて、大涅槃を得させて、普賢の徳に帰せしむる、このような本願の用きということになるのだらう。その利益に「おもむく」こと、すなわち、そちらの方向に顔を向けるということは、換言すれば、そのような本願の用きを信じ、それに向かうということでもある。また、「利益」という言葉を空間化して考えるなら、それは利益の中に入ってそこに座らせてもらおうという、キリスト教的に表現すれば「召される」ということである。

議論を重ねた結果、本研究会では上記の試訳を施すこととなった。(訳・語註：親鸞仏教センター)

れの苦悩の現実を引き受けながら、人々と共に歩み、人々に本願を伝えていきたいという普賢菩薩の徳を自ずと行じていくことができるのである。このような本願がもたらす利益を信じ、その中に自らの身を置くことを「来」という。これを「法性のみやこへかえる」というのである。「迎」というのは、迎えていくのださるということであり、その意は、待っていてくださるということである。如来によって選り取られた分別を超えた願い、如来のこの上ない智慧の名号を聞いて、いつ如何なる場合であっても疑うことのないころを真実の信心というのである。金剛心ともいう。この信心を得るとき、決して見捨てることのない慈悲の用きに包まれるのだから、即座に大涅槃に至るべき身、すなわち必ず仏に成るという位に就くのである。ゆえに、この信心は破れず、傾かず、乱れないから、金剛のごときである。だから、金剛の信心というのである。これを「迎」というのである。

日々是交流

五月一日、交流活動の一環として西洋子先生(東洋英和女学院大学教授)が主催されている「みんなのダンスフィールド」に参加してきました。

西先生によれば、ダンスを通じて自己を表現するということは他者との関係のなかで自分自身を表現していくことにはかなりません。このプログラムのポイントは、公演のためのあらかじめ設定された表現目標があるわけではなく、参加者が周囲の人たちとの関係のなかで、それぞれに身体を通して自由に自己を表現していくことにあります。「そのためにも、さまざまな個性をもった人たちにダンスに参加してもらおうほうがむしろ望ましいと考えています」(西先生)。

車椅子の方々や、老若男女、さまざまな人たちの即興ダンスの輪に加わった感想ですが、はじめのうちは自分を表現することに精一杯でなかなか周囲に意識が向きませんでした。しかし周囲の人たちと共動しながら次第に自分を表現できるようになっていっているという実感を得ることができました。自分はいくまでも自分の身体表現を行っているのですが、同時に、グループ内に見えない力で踊らされているといった不思議な感覚です。

真宗大谷派では蓮如上人五百回御遠忌のテーマとして「バラバラでいっしょ」という言葉を掲げてきています。そこには、他人とは違う自己の個性を大事にしなが、なおかつ共有された他者との関係で創られていく場において、生き生きと自己を表現して生きて行くという、浄土の限りないはたらきが反映されているかと思えます。身体を通して他者との関係のなかで自己を表現していくことと、浄土教的な「場」を創出していくという思想はどこか深いところで共鳴しているのかもしれません。(研究員 山本伸裕)

『聖典』の試訳（現代語化）

「来迎」とは浄土教の大事な概念であるが、それを換骨奪胎したのが親鸞である。すなわち、臨終を象徴してきた「来迎」という言葉を、現生に正定聚を成り立たせる「来迎」として捉え直したのである。

「この利益におもむくを、来」という。（乃至）「迎」というのは、むかえたまうという、まつということころなり。」

自らの「信心」を重ね合わせながら、親鸞は、その言葉が持つ内面的意味を見つめていく。それは「迎」の一字であっても、単に「ただ迎える」という意味ではないということ、つまり、信心を獲るということはしっかりこちらの問題であるとしたうえで「待っている」という、そのような「ところ」を「迎」の一字に見いだしたということである。

ところで、「おもむく（面向く）」とは、もともと「そむく（背向く）」と対をなしていた言葉であるという。穿った見方をすれば、こういう言葉一つにも親鸞の自覚が表現されていると言えるだろうか…。

（囑託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳⑦

原文

法性のみやことというは、法身ともうす如來の、さとりを自然にひらくときを、みやこへかえるというなり。これを、真如実相を証すとももうす。無為法身ともいう。滅度にいたるともいう。法性の常樂を証すとももうすなり。このさとりをうれば、すなわち大慈大悲きわまりて、生死海にかえりいりて、普賢の徳に帰せしむともうす。この利益におもむくを、「来」という。これを法性のみやこへかえるともうすなり。「迎」というのは、むかえたまうという、まつということころなり。選択不思議

現代語訳

「法性（諸存在の普遍の本質）のみやこ」というのは、真理そのものである如來のさとりがおのずとひらけるということ、みやこへかえると表現するのである。これを、「真如実相を証す」（存在のありのままを本当のあり方としてみる）という。この真如実相は「無為法身」（絶対に変わらないものとしての真理そのもの）とも言える。また「滅度にいたる」（涅槃にいたる）とも、「法性の常樂を証す」（法性そのものの自由闊達な境地を実現する）ともいうのである。このさとりを得るとき、即座に大いなる慈しみのところ、大いなる憐れみのところが満ち溢れて、罪や悪を犯さざるを得ない我わ

親鸞仏教センターの動き

（2009・6〜7）―抄出―

■2009年

- 6・1 情報誌『あまのこ』第17号、研究誌『現代と親鸞』第18号、機関紙『親鸞仏教センター通信』第30号を発行。
- 6・2 第38回研究会（研究・交流・出版等の協議と企画）以降定期的に会議を開催。
- 6・5 第83回清沢満之研究会
- 6・12 第38回『唯信鈔文意』研究会
- 6・15 人事発令（近藤順子囑託が東京宗務出張所に発令）
- 6・27 第14回鈴木大拙訳『教行信証』の考究
- 6・30 第15回英訳『教行信証』再版編集会議
- 7・1 第25回（通算・第76回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 7・3 人事発令（前田専学客員研究員、中津功非常勤囑託が再任）
- 7・10 第39回『唯信鈔文意』研究会
- 7・17 第15回鈴木大拙訳『教行信証』の考究
- 8・1 第84回清沢満之研究会
- 8・1 第26回（通算・第77回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 8・1 人事発令（越部良一、法隆誠幸、春近敬が囑託研究員として再任）

● 英訳『教行信証』研究会報告 ⑦ ●

真宗の英語表現と海外伝道—問題点と可能性—

親鸞仏教センター研究員 楠 宏 生

英訳『教行信証』研究会は、センター設立当初から継続して、鈴木大拙の英訳『教行信証』の解説を行い、現在、月例の研究会では「行巻」を読み進めている。また、2009年5月13日、東京ガーデンパレス（文京区）において、武蔵野大学教授のケネス田中（Kenneth K. Tanaka）先生をお迎えして、「真宗の英語表現と海外伝道—問題点と可能性—」をテーマに講義いただいた。ケネス田中先生は、アメリカで二十年という長い期間、多くの英語圏の方々に浄土真宗の教えを指導してこられた。研究会ではそこでの経験とご苦労、そしてご専門のアメリカ仏教、現代仏教などについてお話いただいた。ここにその一部を紹介する。



■ 現代仏教

現代仏教の特徴としては、「理性的」、「文献中心」であり、また「瞑想」を強調すること、そして「参加仏教」（engaged Buddhism）、つまり「社会的改革」や「普遍性」を強調する社会運動であるという点が挙げられる。アメリカにおける仏教がその代表的なかたちである。アメリカにおける仏教徒の人口は、統計では約300万人であり、今後、増加していく傾向にある。また別の統計では「仏教に何らかの影響を受けている」人を含めると約2500万人という驚くほどの数となっている。

その中でも、禅仏教、チベット仏教、南方仏教に関わっている人々の多くは白人であり、共通して、瞑想による“practice”を強調している。それらアメリカの仏教徒たちの間では、「どの宗派に所属しているのか」ということではなく、「どのような“practice”をしているのか」が問われる。つまり、彼らは、教義に対して関心があるのでなく、その“practice”による



ケネス 田中（Kenneth K. Tanaka） 武蔵野大学政治経済学部教授

1947年山口県に生まれる。70年、スタンフォード大学卒。米国仏教大学院修士課程終了。東京大学大学院修士課程終了。カリフォルニア大学バークレー校大学院博士課程終了。哲学博士（仏教学）。米国仏教大学院大学専任准教授などを経て、現在、武蔵野大学政治経済学部教授。武蔵野大学仏教文化研究所長。国際真宗学会会長。仏教キリスト学会評議員。日本仏教心理学会運営委員・事務局長。専門は浄土教、仏教とキリスト教の対話、アメリカ仏教、応用仏教。

著書に、*The Dawn of Chinese Pure Land Buddhism: Ching-ying Hui-yuan's Commentary to the Visualization Sutra* (State University of New York Press, 1990), *Ocean: An Introduction to Jodo-Shinshu Buddhism in America* (Wisdom Ocean Publications, 1997), *The Faces of Buddhism in America* (共編 The University of California Press, 1998), 『真宗入門』(法蔵館2003), *Pure Land Buddhism* (Dharmaram Publications, 2004) など多数。

また、『anjali』第11号（親鸞仏教センター）に、「仏教と世界 伸びるアメリカ仏教とナイトスタンド・ブディスト」を執筆いただいている。

「スピリチュアリティ」（spirituality）を求めているといえる。日本でもスピリチュアリティという言葉は広く注目されているが、その言葉の内容には幅がある。先生はスピリチュアリティを「本質的な宗教体験」つまり「体で体験すること」と定義される。“practice”とは「自分が納得する体験」を求めていくためのものである。このような人々は、アイデンティティとしては「宗派」「教義」ではなく、「この“practice”をやっているから私は仏教徒である」というように、“practice”による宗教体験に関心

がある。一つの宗派に所属するということがなく、「体験」を求めて宗派間を移動することも多く見られる。

また、現代仏教の特徴として、「個人化宗教」(privatized religion) ということがある。これは、環境や家族の問題など、個人的な特定の問題に関する宗教との関わり方である。自分が納得できるような捉え方の中で、つまり伝統や師の言葉を信ずるということではなく、スピリチュアル (spiritual) な部分について宗教と関わっているのである。

また、心理学や心理療法はアメリカにおいて、仏教を受容する一つ大きな窓口となるものであり、その関係を強化していくことは重要である。近年、それに関する書籍が多く出版されている。このような流れの背景には、先に述べた“practice”と「体験」との関係、また、仏教を主体的に捉えている傾向があると考えられる。

■ 真宗の教えの現代的解釈

—伝道の立場から—

浄土真宗の教えの中核となる法蔵菩薩の教えは、異なる国や文化に伝道していくうえで理解され難い。浄土真宗の伝道において一番中核となる部分で躓^{つまず}いてしまっているところがある。では、法蔵菩薩、阿弥陀仏の教えをどのように捉え伝えていくべきであるか。その教え、伝承を“sacred story” (聖なるストーリー) として、また“myth” (神話) として捉えることが必要である。「神話」というのは「おとぎ話」のようなものではなく、「神話」というかたちでしか表現できない真実というかたちをもつ物語である。法蔵菩薩の教えを、釈尊の「目覚め」の流れを受け継ぐ大乘仏教の人々が、その「伝統」の中で目覚めて、それを伝えようとした時の“sacred story”であったと捉え、その“sacred story”を伝えていくことを放棄せず、より理性化し、具体的にどのような意味として示されているのかを考えて、現代に表現していくことが必要である。

その一例として、アメリカでは阿弥陀仏を一般的に“the Buddha of Wisdom and Compassion” (智慧と慈悲の仏) と説明している。こ

の翻訳は非常に理性化されているが、“Wisdom and Compassion” だけの解釈ではいまだ問題があり、この内容をさらに具体的に語っていくことが必要である。また、現代に仏教を伝えていくうえで、「教育」(宗教教育) という立場に力点を置いて考えていくことも必要である。

■ 真宗のキーターム

真宗のキータームとして、先生からいくつかの翻訳語を紹介いただいた。ここでは「本願」、「大行」について紹介する。

「本願」は一般的には“original vow”または“primal vow”などとして翻訳されているが、鈴木大拙は“original prayer”と翻訳している。“prayer”の語はアメリカ社会の中において宗教的な意味あいをもつとともに、一般にも広く用いられている言葉である。他の翻訳に見られる“vow”は、やや「異質的に感じられる翻訳」であり、法蔵菩薩の“sacred story”の意味を理解している人にとっては納得のいく翻訳であるが、一般の人には、“vow”と言っても意味が通じていかないように思われると指摘される。また、“prayer”の語には、“vow”よりも普遍的な意味があり、“pray”の言葉そのものは一般の人にも馴染みの深い言葉であるから、“prayer”は多くの人に受容れ易い翻訳であると指摘される。また、“original”の意味を「最初の」、「本質的な」という意味として解釈され、“primal”「根源的な」の意味にも通じており、“primal prayer”という表現の可能性についてもご指摘いただいた。

次に、「大行」について、鈴木大拙は“great living”と翻訳している点について、「行」の一般的な翻訳は“practice”であるが、鈴木大拙が“living”として翻訳した背景の一つとして、「大行の意味がもっている、主体的に生きていく人間の姿が表現されているように思う」という先生のご理解をお話いただいた。

(文責：親鸞仏教センター)

※ケネス田中先生の講義は、『現代と親鸞』第20号 (2010年6月1日号) に掲載予定です。

● 現代の諸課題と対話する研究会報告 ●

科学と宗教の対話の可能性 (池内了)

「引きこもり」の若者に「宗教」の言葉は届くか (斎藤環)

親鸞仏教センター研究員 常 塚 聡

「現代の諸課題と対話する研究会」は、現代が抱えるさまざまな問題に第一線で対峙しておられる方々との対話を通じて、今に生きる思想として親鸞思想を捉え直し、現代における仏教の役割を考えていこうと願うものである。

本号では、2008年8月21日に池内了氏（総合研究大学院大学教授）をお訪ねして行われた対話の様、及び同年10月21日に斎藤環氏（精神科医）をお招きして行われた対話の様を紹介する。

「現代の諸課題と対話する研究会」発足の願い

現代という時代がわれわれに課題として突きつけてくるものは多い。時代と真剣に対峙していこうとするなら、その課題を問うことなくして、現代社会に向かって言葉を発信していこうとしても無意味であろう。

この研究会は、第一線で現代の課題と向き合っている有識者の方々との対話を通じて、現代とはどのような時代であり、現代に生きる人間が抱えている課題とは何であるかを、さまざまな立場の方々とともに考えていこうとするものである。

現代という時代に生き、しかも親鸞仏教を自らのよりどころとして生きたいと願う私たちにとって、このことは現代における親鸞仏教の意義を問い直していくということに他ならない。この研究会を通じて、現代に生きる思想として親鸞仏教が今の時代に力強く立ち上がることを願うものである。

■ 池内了氏との対話

第1回の研究会は、総合研究大学院大学（神奈川県三浦郡葉山町）に物理学者の池内了氏をお訪ねし、「科学と宗教の対話の可能性」をテーマとして行われた。

今回、池内氏をお訪ねするきっかけとなった



池内 了（いけうち さとる） 総合研究大学院大学教授
1937年、兵庫県に生まれる。京都大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程修了。理学博士。2006年、総合研究大学院大学教授。銀河系を泡の集まりと見立てた『泡宇宙論』で知られる。著書に『宇宙のかたちをさぐる』（岩波ジュニア新書）、『お父さんが話してくれた宇宙の歴史シリーズ』（全四巻、岩波書店）、『疑似科学入門』（岩波新書）、『ノーベル賞で語る現代物理学』（新書館）など多数。

のは、氏が2008年に出版された『疑似科学入門』（岩波新書）であった。現代の社会には、一見すると科学であるかのように装っているが、実は科学の知見とは全く相反するものが存在している。一見、科学のように見えるために、現代社会の問題に真剣に取り組もうとしている教育者や宗教者のなかには、「善意」からそのような言説を取り込んでしまうという例もある。そのような「疑似科学（ニセ科学）」の影には詐欺商法や疑似医学といった問題も潜んでいる。社会の問題に取り組もうという「善意」が、詐欺や医療被害の片棒をかついでしまうことにもなりかねない。

池内氏との研究会は、このような問題意識のもとで、「宗教と科学が対話するうえで、疑似科学の問題をどう考えるべきか」、「科学文明の中での宗教の役割とは何か」という課題をめぐって行われた。

池内氏が対話の中で強調されたのは、「科学は人々の幸福を守るためにある」ということで

あった。「疑似科学」については、それは直接人々に被害を与えるものであり、「人間を不幸にしないように考えて行動することが科学者の使命だ」と強く批判された。また、科学的には必ずしも決着が付いていない問題に対しても、科学者としてそれが人間を不幸にするものにならないように留意しなければならない、と話された。

「人間の幸福のために」という目標は、「抜苦与楽」という仏教が掲げる根本の目標とも同じ方向を向いているといえる。科学と宗教は、ともに人間の文化において欠くことのできない営みである。氏は、「世界の素晴らしさに感動し、それを愛でる気持ちは科学でも宗教でも同じではないか」と言われた。ともに長い時間に鍛えられた人間の英知の集合として、科学と宗教とが協調し合って、人類の抱える問題に取り組んでいく必要があるのではないだろうか。

※池内了氏との研究会の詳細は、『現代と親鸞』第18号（2009年6月1日号）に掲載されています。

■ 斎藤環氏との対話

第2回目の研究会は、ルノアール銀座三丁目会議室（東京都中央区）に精神科医・評論家の斎藤環氏をお招きし、『引きこもり』の若者に『宗教』の言葉は届くかというテーマのもとで行われた。

ここ数年の社会の趨勢は「自由主義化」と「心理主義化」という言葉で言い表すことができるだろう。「自由主義化」とは、裏返せば、強者の論理であり、つまりいた弱者は際限なく転落していかざるを得ない。もう一方にある「心理主義化」とは、現実社会は自分の心の持ちようの反映であるとする傾向のことである。そうなると、現実の社会にむけられた問いは、自己の内面へと屈折させられる。その結果、人々は自分自身を追い込み、自分の殻の中に閉じこもらざるを得なくなる。

そのような中で苦悩する人に、はたして何を語りかけ、何を伝えることができるだろうか。「言葉」に、そのような人に伝わる力があるだろうか。

斎藤氏との研究会では、このような問題意識のもとで、『引きこもり』はなぜ問題とされているのか、『引きこもり』問題にどのように関わればよいのか、『言葉』は力を持ちえるのかといった点をめぐって議論が交わされた。



斎藤 環（さいとう たまさ） 精神科医

1961年生まれ。筑波大学大学院医学研究科博士課程終了。医学博士。爽風会佐々木病院診療部長。思春期の精神臨床を専門とし、ひきこもり問題の臨床、啓蒙活動に携わる。著書に『社会的引きこもり—終わらない思春期』（PHP新書）、『心理学化する社会—なぜ、トラウマと癒しが求められるのか』（PHPエディタース・グループ）、『思春期ポストモダン—成熟はいかにして可能か』（幻冬舎新書）、『母は娘の人生を支配する—なぜ「母殺し」は難しいのか』（NHKブックス）など多数。

斎藤氏が強調されたのは、「引きこもり」を一部の異常な人の特異な現象ととらえるのは誤りであるということであった。斎藤氏によれば、「引きこもり」とは、現代日本の若者の典型的な行動様式のひとつである「内向性」が、極端な形を取ったものであり、この傾向を強くもつ人が、何らかの挫折をきっかけにして「社会的敗者としての自己イメージ」を固定してしまうと、そのために社会的活動が疎外され、社会から背を向けているという現実がさらに自分を追いつめるという「負のスパイラル」に陥ってしまう。

しかし、日本社会はこのような「内向的」な人間に対して非常に非寛容であると氏は指摘する。「引きこもり」を単なる怠け者、犯罪者予備軍と罵倒してマスコミで喝采を浴びる識者の中には宗教家を名のるものも多い。しかし、そのような「宗教」の言葉は、はたしてもっとも届けなければならないはずの「引きこもり」の若者のところに届いているだろうか。

斎藤氏は、安易な教訓的メッセージは無意味であり、むしろ、存在を受容し、見守っているという「態度」そのものが必要であるという。それはまた、苦悩の中にある人の力となり続けたいという願い、そしてそれを支える勇気と力ということでもあろう。それこそが、実は宗教に求められていることなのではないだろうか。

※斎藤環氏との研究会の詳細は、『現代と親鸞』第19号（2009年12月1日号）に掲載予定です。

第7回「親鸞仏教センターのつどい」を開催（4月21日）

親鸞仏教センター（東京都文京区）において、4月21日、第7回「親鸞仏教センターのつどい」が開催された。午後1時から同センター仏間において勤行。その後、会場を「学士会館本館」（千代田区）に移し、記念講演と交流懇談会が行われ、さまざまな分野で活躍している各界の学識者、ジャーナリストなど約90名が集った。

記念講演では、埼玉大学名誉教授の暉峻淑子氏（写真上）が、「経済の豊かさで生きることの豊かさ」と題する講演を行った。

暉峻氏は、「如何に最小のコストで如何に最大の効果を上げるかという、経済的な考え方が今の社会原則になり、教育にも大きな影響を与え、金融危機をまねいている」ことを指摘し、海外での人道支援活動に関わる中で、「今の社会原則とまったく裏側にある、助け合って生きるという生き方、みんなが一緒になって生きよう」という競争原理に対抗する原理としての「助け合う」ことの大切さを語った。

次いで、本多弘之親鸞仏教センター所長が「信心の養育」と題する講演で、「人間はどのような状態であっても自我が離れられないし、自己かわいさの煩惱が抜けない。そういう関心でしかこの世を捉えられない限りは、決して浄土の功德には触れられない。それが翻^{ひるがえ}されることが起る。その翻^{ひるがえ}そうという用^{はたら}きを如来の本願と教え、大悲と教える。その大きな用きは、必ずや有限なる存在に用きかけずんば止まないというのが本願の教えである」と語った。

引き続きの交流懇談会では、江尻静哉参務挨拶の後、東京女子医科大学顧問の神津忠彦氏より祝杯の辞が述べられ（写真下）、参会の有識者の交流会が持たれた。席上、鈴木洋子（弁護士）、加藤智見（東京工芸大学教授）、中澤忠正（TBS社長室顧問）氏など各氏から、当センター活動への激励の言葉をいただいた。

※講演記録は、「現代と親鸞」第20号（2010年6月1日号・1冊1,200円）に掲載の予定です。



あ と が き

宗祖親鸞聖人750御遠忌の宗派記念事業の一つとして、2005年度から当センターが取り組んでいる鈴木大拙師の英訳『教行信証』再版は、原稿完成への大詰めを迎えている。編集作業の進行中に松ヶ岡文庫で大拙師の序文原稿（三種）が発見され、詳細な検討が必要ともなり刊行時期が延びたものの、監修の前田専学東京大学名誉教授を中心に編集委員の緻密な検討を経て、大拙師の意図にできる限り近い内容としてまとめられている。また、語彙説明、文献目録、索引なども、初めて真宗仏教に触れる海外の大学生、大学院生が利用できる内容に編集されている。その意味で、本書は「再版」というより「新版」と言える。宗祖親鸞聖人に、そして1973年の英訳出版を見届けることなく96歳でお亡くなりになった大拙師に喜んでいただける出版となるよう力を尽くしたい。▼再版といえは、当センターの研究活動から生まれた『現代語訳異抄 いま親鸞に聞く』（朝日新聞出版社刊）が、さきごろ重版された。喜びと共に、「親鸞の思想・信念を現代語で表現し直す」センター活動の大切さを再認識している。（木曾）▼新たな取り組みとして「現代の諸課題と対話する研究会」が発足した。現代の諸課題とは、紛れもなくわれわれの問題である。その問題を一人ひとりが担っている。なんの不自由もないはずなのに沸き起こる虚無感、なんとも言い表すことのできない不安感、なぜか常に付き纏（まと）う焦燥感。その感情を紛らわそうと、また、その憂いから逃れようと、さまざまなことにエネルギーを浪費する。その中に、疑似科学に身を委ねることがあるのかもしれない。宗祖親鸞聖人は、そんなわれわれが、安心して倒れることのできる、大地を開拓してくださっているといいただく。大地があれば立ち上がることができる。「現代を生きる思想として親鸞仏教が今の時代に力強く立ち上がることを願」いとして発足された研究会。今、この身は首都東京という、言うなれば日本の中心にある。しかし、値なくして加えられている僧伽の端っこで、その対話に耳を傾けていきたい。（大江）▼Eco プームはさらに広がりを見せる。Eco ポイントが導入され、積極的に省エネ家電の購入が奨励されている。昨今のゲリラ豪雨など、自分に直接関係する形で地球温暖化を感じると、なにかしなければ…と思う。私もEco が叫ばれ始めた時にEco 家電とされる洗濯機を購入し、少ししてからフと思ったことがある。洗濯機を購入した事で「Eco な私」に酔い、いい人になったような気持ちがある。近代文明は私の欲望をとてうまく形にし、「便利・早い・快適」を底なしに「もっともっと」と掻き立ててきた。そんな欲望丸出しのツケが今になって現れているのに、少し洗濯機を変えただけで「いい人」になった気になる。いい気なものだ。自分の都合を優先し、都合よく解釈しようとする、そんな私の根性を親鸞聖人は問題にされたのだらう。そのような自分と、親鸞聖人とが向き合う場が与えられているのではないかと思う。（鈴木）

親鸞仏教センターの 発行物を ご自宅にお届けします。

会員
募集中!

年会費1,000円（送料込）で、情報誌『アンジャリ』（年2回）と機関紙『親鸞仏教センター通信』（年4回）をご自宅にお届けします。ぜひ「アンジャリの会」にご入会ください。知人や友人等のご紹介もお受けします。また、バックナンバーのご希望も承ります。

申し込みと問い合わせは、

親鸞仏教センター内
「アンジャリの会」T係

TEL 03-3814-4900

FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

まで。

●センター新スタッフの紹介

主事補 大江 覚 成
書記 鈴木 真 記